



藤谷 謹至 議員
(拓政会)



1969年7月、旧忠類村晩成の道路工事現場でゾウの歯の化石が見つかり、日本で初めてナウマン象一頭分の化石骨が発見された。ナウマン象化石骨発見50周年記念事業では、北海道博物館に収蔵されている全47個の化石骨が十勝で初公開された。

また、足跡化石の発掘調査では、新たに足跡化石と見られる二つの「くぼみ」が発見され、さらなる夢も膨む。以下の点について伺う。

- (1) 50周年記念事業の現時点での主な検証結果は。
- (2) 来年度以降の発掘調査について具体的な考えは。
- (3) 町内小中学校の記念館利用実績、化石骨の学術的価値を授業等にどう活用しているのか。
- (4) ナウマン象記念館の展示物を含め、施設のリニューアルや学芸員の配置、どのように化石骨の価値を高め、活用して地域振興へとつなげていくのか。

問 世紀の発見「ナウマン象化石骨発見50周年記念事業」終了後の考えは

答 来年度も発掘調査を実施したい、記念館のリニューアルを考える時期にもある

教育長

(1) 世紀の大発見で沸いた当時を振り返り、忠類ナウマン象の学術的価値と歴史を再確認することを目的に、記念講演や特別展などを開催した。子ども達の体験の場として実施した特別展の準備では、忠類小中学校の児童生徒に、忠類の宝物に触れる機会を与えることができた。また、50年前の発掘に携わった北海道教育大学名誉教授の木村方一氏、かぼちやプロジェクトを提案した札幌市円山動物園飼育展示課調整担当係長の朝倉卓也氏、ナウマン象と思われる化石の化石をマンモス象のものと特定した、滋賀県立琵琶湖博物館館長の高橋啓一氏をお招きして記念講演会を開催した。

忠類ナウマン象記念館の入館者数は、合併した平成18年度以降最多となる1万4461人を記録し、大きな事業効果があったと推察している。

(2) 再発掘調査では、足跡化石の可能性がある二つの「くぼみ」が発見され、足跡化石専門家に分析を

依頼した。現状では、ナウマン象の足跡の可能性はあるが、「くぼみ」の保存状態が悪く、現時点で具体的な動物の特定には至っていない。同定に必要なデータを得るため、さらなる調査を行い、ナウマン象の生態解明に近づく手がかかるを得たいと考えている。

(3) 小学校では社会科や生活科、総合学習の授業の中で、2校76人が「忠類ナウマン象化石の里帰り展」や施設の見学を行い、中学校は総合学習の授業の中で、1校47人が特別展示の準備に携わるなど記念館を利用し、さらに今後、小学校1校116人が社会科の授業で利用する予定となっている。

授業への活用は、社会科副読本において、小学校3年生で「わたしたちのまち みんなのまち」の中の「忠類はナウマン象発掘の町」で、ナウマン象復元骨格の写真やナウマン象の大きさについて、小学校4年生は「郷土を開いた人々と時代の移り変わり」の中で、ナウマン象記念館や化石発掘の様子

を掲載し、学習している。今後地元にある生きた教材の活用について工夫したい。

(4) 展示物は記述内容を見直す必要性が生じたことに加え、開館から31年が経過し、展示機器の更新等、リニューアルも考えなければならぬ時期であり、北海道博物館や足寄動物化石博物館など専門的なご意見をいただき、確認作業を進めたい。

専門的な学芸員の配置は、忠類ナウマン象の調査研究のみならず、幕別町蝦夷文化考古館や幕別町ふるさと館の収蔵資料の整理、調査などの課題も含め、総合的に検討したい。



ナウマン象足跡化石の発掘調査